

コメント：宣教師の帝國的な性格を考える

駒 込 武

I 宣教師の「帝国（主義）的」性格をどのように考察すべきか？

「宣教師は、帝国主義の先兵」という見解が「単純すぎる」という点をご指摘の通りだと思います。この点は、陶先生の報告で「宣教師の設立した学校が文化侵略（cultural aggression）の担い手であったという見解に対して、近年では西洋の知識をもたらしたという側面も着目されている」と紹介されていた動向ともかみ合います。「手先」という表現は不適切だとしても、宣教師が、あるいは、総体としてのミッションのプロジェクトが、どのような意味で「帝国（主義）的」であったか—あるいは「帝国（主義）的」影響力に抗しようとしたのか—という問いは残り続けるのではないのでしょうか。その際、水谷コメントで指摘されるように、ミッション教育の「現場」に即して、宣教師たちと、「Nativeの権力（教育権）」との「衝突」のありようを考察することが必要だと考えます。

II 「Nativeの権力」をめぐる中国と日本の相違はどのように生じたのか？

小檜山報告レジュメによれば、中国の学校では「教員はアメリカ人女性が主で、イギリス人女性が従」であり（中国に存在しながらも）「全くのアメリカの大学」だったのに対して、日本の学校では「教員は日本人男性が主で、日本人女

性が従…宣教師は専ら英語を教える」「はじめから日本人が運営し、宣教師は理事会を形成し、経済支援に特化」されたということです。また、陶先生は“most colleges became jointly administered and founded from the American side by the United Board for Christian higher education in China, whose head office was in New York City”と報告されています。

なぜこのような相違が生じたのでしょうか。ミッションは「あくまで private sector によるもので、native の側の自由な選択を前提とする事業」ということですが、中国人信者がアメリカ人宣教師中心の管理運営体制を望んでいたということなのでしょう。中国人の信者も実は東京女子大学のような形態を望んでいたからこそ、1927年以後の教育権回収運動において管理運営体制を掌握することになったとは考えられないでしょうか。

Ⅲ 米国系ミッションは、なぜ女性への宣教を重視したのか？

アメリカの日本占領政策について論じた土屋由香さんは、日本の戦後改革における男女共学化は、一方で、大学教育の女性への開放を待望していた人びとの要望に支えられながらも、他方で潜在的な「親米派」としては男性よりも女性が有望であるという判断がなされていたと論じています（同『親米日本の構築』明石書店、2011年）。この「親米派」という表現に着目するならば、「東洋の7つの女子大学」が構想されるにあたっては、米国がハワイの人びとに対したときと同様に「キリスト教化に成功せずとも、その教育、医療事業を通じて現地人親米派を育成し、アメリカ的ライフスタイルを知らしめ、道徳観—特に恋愛と結婚、性に関するもの—を植え付ける」（小檜山「『帝国』のリベラリズム」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂、2007年）必要が意識されていたと考えてよいのでしょうか。それとも、米国の一部に組み込まれるハワイと、中国や英領インドに対する場合では大きな相違が存在したと考えるべきでしょうか。

IV ロックフェラー財団の役割はいかなるものだったのか？

今回の御報告から、宣教師による教育事業の意味を評価するにあたって、個々の宣教師や宣教師団体の本部ばかりではなく、資金提供者としての財団に着目する必要を教えられました。報告では「圧倒的資金力とその気前のよい運用が新参のアメリカ帝国の特徴の一つ。その支援財団と道徳的／宗教的目的の合体」とされていましたが、ロックフェラー財団は、学校の設立場所、管理運営組織、教育方針や教育内容に影響を及ぼしていたのでしょうか。それとも、「金は出すが、口は出さない」ということだったのでしょうか。Woman's Medical College がロックフェラーの援助対象から外されたのはなぜなのでしょう。

V ミッション高等教育をめぐる米国人宣教師と英国人宣教師の相違は？

小檜山報告と水谷コメントをつないで考えると、次のようなパターンが考えられます。

中国における米国人宣教師	英領インドにおける米国人宣教師
中国における英国人宣教師	英領インドにおける英国人宣教師

このうち米国系と英国系の相違については、米国の社会学者ロスが 1911 年の時点で、中国におけるミッションの教育事業について次のように記していることが着目されます。

「イングランド人宣教師が努力の中心を翻訳と福音宣教においていたのに対して、アメリカ人は教育と医療にも同様に多くのことを成し遂げている。高等教育においてはほとんどアメリカ人の独占状態となっている。14校のプロテスタント・ミッション系の学院 colleges と大学 universities のなかで英国人により維持されているのは1校だけであり、残りはアメリカ人が共同の経営である。おそ

らく英国人のアパシーのひとつの原因は、大学教育という機会がインドでヒンドゥーの生徒をキリスト教化することに失敗したこと、教育あるヒンドゥーによって攪乱されるトラブルが生じたことだろう。しかし同時に、アメリカ人と異なり、英国人は単に教育の価値を信じていないようにも思われる」(E.A.Ross, *The Changing Chinese: the Conflict of Oriental and Western Cultures in China*, London: T.Fisher Unwin, 1911, pp.226-227)。

これは水谷さんへの質問ですが、このような対比はどこまで適切とみなしうるでしょうか。また、「中国における」と「英領インドにおける」の対比に関してですが、小檜山レジユメにて「アメリカ人女性宣教師は、nationalist movementに理解を示すこと多かった」と記し、水谷コメントも「インド人の政治への目覚めや運動は「愛国」としてむしろ支援」としています。では、その「理解」や「支援」の内実はいかなるものだったのでしょうか。自分の属する国家の施策への批判に向かうような徹底性を備えていたといえるのでしょうか。